岸辺のない海

金井美恵子

中央公論社

岸辺のない海　©一九七四　検印廃止
定価八八〇円
昭和四十九年三月二十日初版印刷
昭和四十九年三月三十日初版発行
著　者　金井美恵子
発行者　高　梨　茂
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一（代）
振替　東京三四

岸辺のない海

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

夏の終わりのある日、彼はバルコニイに出て、デッキ・チェアに身を沈めていた。黄昏の気配が空気の中にしのび込み、淡い水色の空の彼方は徐々に夜に呑み込まれようとして微かに震えている。草むらの上を低く黄色い蝶が風に吹かれる小さな黄色の花弁のように、ゆっくり、けれど軽やかに飛んで、もうその姿は見えなくなってしまう。少し湿った黄昏の濃密な空気とわずかな風に包まれ、草むらの蔭で虫が鳴き、葉ずれの音は遠い海鳴りのように時々あたりの空気を震わせ、西陽がガラス窓を反射させる。遠くの、ここからは見えない海岸線に沿った街道から、何台ものトラックが走りすぎる低いうなり声が聞えてくる。灰色のアスファルトの道に巨大なゴムのタイヤが超スピイドで回転しながらこすりつけられる音、巨きな車体が風を切りながら身を震わせて疾走する爆音、それからオートバイや乗用車が街道を走り去って行く音。隣家の庭では犬が吠えながら駆けまわり、子供たちがその後を追いながら、犬の名前をけたたましく呼び、かん高い叫び声をたてる。犬は嬉しそうに吠えたて、多分、しっぽをあわただしく振りながら、子供たちをからかうように時々急に立ちどまってその場で体を回転させてみたりして、子供たちが追い

つきそうになるとまた敏捷に体を撓わせて走り出す。夏の黄昏どきには不思議な魔力があって、潤った濃密な夜気が長い午後の中に流れ込み、草むらや花や樹木のきつい芳香が、淡いオレンジ色の空気に溶け込む頃、おそらく家庭では夕食の準備のために鍋がガス・テエブルにかけられ、水気を切ったサラダ菜がセロファン紙のように薄い透明なラップに包まれて冷蔵庫に入れられる頃、あの奇妙に誘惑的な子供たちと動物の時間がやって来る。不可視のハメルンの笛吹きが吹き鳴らす聞えない旋律が黄昏の濃密な空気の層を震動させ、その微かな震動を子供たちと動物たちは聞きわけるのに違いない。まるで気でも違ったように子供たちは叫びたて絶え間なく身体を動かし、犬はしっぽを振りたてながら吠え、子供たちと動物たちを奇妙な興奮で包み込む黄昏の中で、彼はキャンバス地のデッキ・チェアに身を沈め、それらの物音に耳を傾ける。やがて、黄昏の淡いオレンジ色の空は薄明の灰色を流し込み、丈の低い灌木の林の間の白い小道の上に夜が訪れ、子供たちも動物たちもいなくなり、偽りの夜の静寂にあたりは包囲されはじめるだろう。街道を走る夜行便のトラックは、一晩中鈍いエンジンの音を響かせたし、空の高みには何十人もの乗客をジュラルミンの内臓に飲みこんだ飛行機が爆音で空間を切りとりながら通りすぎたし、そうした金属の世界の音の間から、遠い海鳴りと、森の静寂を主張するように山鳩のくぐもった鳴き声や虫の音が聞えて来る。

《ぼくは彼女たちに電話をしたし、ピンクの薄暗い照明の安っぽいホテルの部屋で短い時間をすごしたりした。彼女たちを、時には愛してさえいたかもしれない。化粧した顔で、手には銀色のホルダーにはさんだ煙草を持ち、椅子の上で組んだ右脚を絶えずゆすりながら、彼女たちは自分でそれと気づかずにいつも嘘を喋った。そうだ、彼女という単数の存在はもうどこにもない。彼女たちと短い時間をすごした都会のホテルの部屋で、ぼくは、きみとかあなたとか稀には名前を言って彼女たちに呼びかける。ごくつまらないことを言うために。その時に、無数のその時に、あなたでありきみであった彼女たち。薄暗い部屋の中の、白いシーツに隠された彼女たちの白い肉体。快楽の中に沈み込む寸前の、ぼんやり見開かれた眼と、ものうい調子でぼくに語りかける言葉。それは言葉というよりは、とぎれとぎれの無意味な発声にすぎないのだけれど、そうした無意味な発声の中に、じゃりじゃりした雑音がぼくの耳の内側の柔毛に覆われた薄い膜をひっかく言葉が、稀薄な空気を吸いこもうとして開かれた口から絶えず漏れる喘ぎの間に、発されるのだ。ものうい調子から、次第に高まっていく声で、彼女たちは、いわば愛について語ったというべきだろうか。そんなことはぼくにはどうでもいいことだった。ぼくは何を考えているのだろう。ほの白く浮びあがる柔らかな身体の上に乗っかり、不様な裸の背と尻を空間の中にさらしながら、こうしていることが快楽だと思うことは難しい。ぼくの、それ自体としては熱心だったかもしれない動きに合致して彼女たちは正確な反応を示し、それはあたかも、二人の男女の間に成立する伝達の機能であるかのように見えないこともなかったけれど、ぼくの身体の下で、快楽に沈み込

み、快楽の温かい海の中で我を忘れている彼女たちは、ぼくにとっては不気味で疎ましい存在だった。奇妙な快楽の波の中で、ぼくらは身体を重ねあわせ、昂りを迎えようとしている彼女たちの、むき出された身体の上で、ここからは見えない窓の外に（窓には厚い黄土色のカーテンが引かれている）眼をこらす。苦し気なうめき声がぼくを包みこみ、ぼくの背中を愛撫する彼女たちの指の向う、空間の中に融け込む闇の中に、言葉を読みとろうとする。それは決して解読されない言葉だ。彼女たちの肉体によって隔てられ遮られてしまう言葉。けだるい疲労の沈澱をためた身体をシーツの上に横たえながら、ぼくはここから一時も早く出て行くことを願っている。ぼくのかたわらで彼女たちは規則正しい寝息をもらし、薄い壁で隔てられた隣の部屋から微かな寝台の軋む音と話し声が聞え（ほとんど聞きとることは出来ないが）、ぼくは自分の裸の肉体が触れているシーツの端を右手で触ってみる。無数の二人ずつの男女の身体が触れたはずのシーツ、微かに鼻をつく消毒薬の石油のようなにおいのする白い布、このよそよそしい衛生的なにおいのしみついた白い布の波の中で、ぼくの皮膚は、重苦しく閉ざされた世界にさらされる。ぼくは白い布の波の中に柔らかな鈍重な肉体を横たえている女に、もう嫌悪しか感じない。それは美しくもなく、むしろ滑稽で、ぼくをうんざりさせた。女たちの肉体によって、ぼくは空間の中でぼく自身の肉体から遮られる。女の肉体は、まさしく世界とぼくの関係の間に唐突にあらわれた厚い壁であり、そのためにぼくは世界に対して迂回しながら近づくことになるのだ》

湿った樹木と草の香り高い匂いが彼をとりまき、木々の間からもれる月の光と、夜露に濡れた見えない草むらの中で虫が鳴いていた。森は厚い黒々とした腐植土と草と樹木に覆われ、今も、こうして彼がデッキ・チェアに身を沈めている間にも、地面を覆っている草むらに隠された枯葉や虫の死骸や蛇苺の小さな赤い実が徐々に腐蝕しつづけ、それらの有機物が深い湿った土壌の中で分解され、大地はすべてを溶かし込みすべてを吸収し、温かな血液を地下深く巡らせながら、ひっそりと息づいている。豊饒な生と死が太陽と土によって形づくられ、燃えあがり、きつい芳香に包まれた空間を作り出すのだった。バルコニイの下に植えられた秋咲きの薔薇が彼の鼻孔を甘い透きとおった芳香で充たし、森の様々な植物たちのたてる匂いのまじりあった濃密な芳香の空間が、風によって彼の身体の外縁に運ばれ、彼を包み込む。楓の木の幹に取り付けられた誘蛾燈の淡青色の光を発する円筒の周囲の淡いオレンジがかった光の輪の中で、鱗粉をふりまきながら茶色やオレンジ色の蛾がクルクル飛びまわっている。彼は、デッキ・チェアからゆっくり身を起し、バルコニイの左手の扉を開けて部屋の中に入る。

とどまることなく、続けざまに亡命しつづけること。それは書くことに他ならない。休みなく、

夜と昼のたまりの中で、肉体を包囲する空間と、閉ざされた道の迷路の中で、地図の中の緑色の平野と薔薇色から茶色へと色を変える山地と、赤い糸筋のような等高線と水色の河川と、鉄道と道路と地名を記す小さな点の中にわけ入り、地図に描きこむことの出来ない空間へ、生きるために、もしくは、生きる理由なんてものがないことを知るための逃走、そして闘争。ぼくは書きつづけよう。ぼくの灰色の表紙の航海日誌を——。岸辺のない海をめぐる永遠の航海に、永遠の不可能の航海に出かけよう。ぼくは書きつづける。書きつづけるために——。

何よりもまず、休みなく書きつづけること——。

《ぼくらは何一つとして内容のある話などしなかった。夜に隔てられた二つの部屋でぼくらは小さな穴を穿った送話器に唇を近づけて、言葉と、他ならぬ彼女のものである自分の存在の気配を送り込み、耳に近づけた受話器から、彼女の言葉と存在をとらえようとした。開け放された窓の外の夜の闇は星を飲み込んで、ぼくと彼女を隔絶する空間として無辺の彼方まで続いている。それからぼくは彼女に手紙を書く。部屋に飛び込んで来る蛾をつぶしたりコオヒイを飲みながら、あるいは単に机に向って、ここに今彼女がいないという奇妙な現実にとまどいながら。……電話であんなに話をしたのに、まだ書くことがあるなんて、われながら不思議です。電話という文明の利器に漉されてしまうあなたの声や息づかいに、ぼくは想像力という武器で立ち向い、あなた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の現実の姿を作りながらお話をするので、気を悪くなさらないように前もって注意を喚起したうえで言うのですが、あなたが何をおっしゃったのか、ぼくが何を喋ったのか、半分もわかってはいないのですよ！　手紙なら、少なくとも、ぼくが何を書いたのか、あなたのお目に触れる前に読みかえしてみることができるでしょう？　その分だけ、馬鹿なことを言ってあなたを驚かせたり嘆かせたりすることが少なくなって、ある種の自己満足（満足なんてことは決してありませんが！）に近いものが得られるというわけでしょうか？　電話を切る時の、もう切らなくてはならない時の、ぼくの震える神経があなたにはわかりますか？　最後の言葉を、なるたけあなたの心の中に残る、これから眠るあなたが夢の中でぼくにあわずにはいられなくするような、魔法の言葉にしたいんです。魔法の言葉を使おうとして、ぼくは焦り、それを思いつかないと、すっかりいやになって絶望的になって、途中で電話を切ってしまいたくなるほどです。ぼくは（もしかしたら、いいえきっと間違っているのでしょうが）あなたがぼくに対して、ぼくが最後に口にする魔法の言葉を聞くために、ただその事のためだけに、ぼくを（ぼくなんぞを！）愛してくださっているのじゃないかと本気で考えているのです。としたら、あなたの愛に対して、ぼくは全身全霊をかけて、言葉を選ばなくてはならないんです。笑っては駄目ですよ。ぼくは自分の犯している過ちに気付いていても、傲慢にもそれを正そうとも悪いことだとも思っていないんですから。というより、それしかぼくには出来ません。これがぼくの愛し方です……手紙は彼女にとどくだろう。白い厚ぼったい角封筒の中に畳まれた細い黒い文字の行列は彼女によって読まれ、彼女以

外の者には読まれることもなく、あるいは本当の意味では彼女にも読まれることはなく、縁を黄ばませたその他の数々の手紙と一緒にピンクのサテンのリボンで束ねられ、机の抽き出しの奥に無造作な優しい手つきでしまわれる》

ほとんど人気のない浜辺は海水浴場というよりは塵芥捨場といった方が正確かもしれない。荒い黄味がかった色の砂利と小石の浜辺には、ありとあらゆる廃品が山になって積み重ねられ、錆びてひしゃげたドラム罐、青いペンキが剥げ落ち、ところどころ虫が喰ったり腐蝕しかけている木製のアイス・キャンデーの箱（ペンキはまるで日焼けした皮膚のようにささくれ、木の肌にかろうじてはりついている）、錆びついた自転車のハンドルと前輪、こわれたオルガン、マネキン人形の真紅のマニキュアで飾られた手首、派手な彩色の木馬の頭の飾りをつけた幼児用の琺瑯のオマル、竹や籐で編んだ籠、色の褪せた花模様の絨毯、詰め物の藁のはみ出たマットレス、脚のとれた椅子、等々が雨を吸い込んで水死体のようにブクブクにふくれあがったり、中には太陽に晒されて表面だけは乾いて土と砂をこびりつかせながら、鈍いジュラルミン色の海を背景に、まるで海から流れついた巨大な難破船の遺品のように、小さな築山をかたちづくっていた。築山を構成する物体のいくつかの物、器状のくぼみを持った物の中にはにごった黒い雨水がたまり、子子がわいていた。この廃品の築山だけでなく海水浴場全体が、いわば観光地としては廃地であり、

塵芥の築山から少し離れた海辺には、赤や青や黄色のタオルを広げて四、五人の男女（正確に言えば、二人の男と三人の女）が寝そべっているだけだったし、もとより泳いでいる人は一人もいなかった。彼等から十メートルほど離れた場所に、青い海浜タオルをひろげ、そこに腰をおろし、弱々しい黄ばんだ光の中に広がっている陰鬱な重苦しい海を眺めた。海は蜜蠟のように不動で、太陽は鈍色の腐敗した牛乳のように凝固した雲に隠され、雲の塊の希薄になった部分から、弱々しく淡い光線をオレンジ色の透明な紗の襞のように海へ入射させていた。海は灰色のジュラルミンのように平板に、水平線と空のまじわるあたりがぼやけ、蠟の塊のように動かなかった。灰色の重い垂れこめる空虚の中で、長い時がすぎ、あるいは長い空白の時が止り、その奇妙な時の中で、彼は長いことじっとしていた。もう、場所もわからず、時もなく、ただ彼は坐っていた。彼はズックの袋の中から灰色のノオトを取り出して、それを膝の上に置き、間にはさんである古びて角が変色して茶色になり毳立った水色の封筒を取り出す。日付は十年前。ある少女が彼にあてて書いた手紙だった。彼は今よりもずっと快活で情熱にあふれ、一日だって、いや半日だって、書かずにいると不安になり、吐き気がするほどだった。まるで書くことだけで生きていた奇妙な時間。

——わたしにとって、あなたが誰であるのか、あなたの正体が何であるのか、あなたはわたし

に答えさせようとなさるんですね。〈きみにとってぼくは誰で、何者なんでしょう〉とあなたはおっしゃるけれど、あなたが聞きたがっている答えがわかるので、そして、それを聞いてあなたが安心したがってることもわかるので、あなたをがっかりさせてやりたい気持になってしまいます。なんて、お馬鹿さんなんでしょう、あなたは。わたしが、あなたは恋人だと答えたら、どうするつもりだったの？　でも、そんなことは答えないし、はっきりしていることは、わたしたちはお互いに愛しあえる存在じゃないってことですものね。もし、わたしたちがその気になれば、愛がなくても肉体の快楽を持つことは出来るでしょうけれど、わたしもあなたもそれをひどく怖れているのです。それはまさしく、愛しあえない存在だからであり、もちろん、わたしたちは、愛がなければ肉体の結びつきが許せることではないなどという道徳（モラル）なんて軽蔑しきって踏み倒しているけれど、問題はそんなことではなく、相手があなたでありわたしであるという、単にその一点、重大な意味を持つその一点のために、まるでそうすることが、隠されていたお互いの愛をむき出しにしてしまうのではないかと怖れるように、あるいは、お互いが処女と童貞で結ばれたら（他ならぬ、わたしとあなたが）それがまるで一生ぬぐい去れない傷になってしまうのじゃないかと考えているのです。書くことのために、その情熱のために、無垢の肉体を賭けるのが怖ろしいんです。大人になったらたとえ大人になった時何をしていようとも（もう書かなくなってしまっていても）それをひどく滑稽なことに思うのじゃないかってことが、怖ろしいのです。もうやめましょう。こんな議論は。あなたは、今も、そして、わたしたちが手紙を交換するようにな

って以来、わたしの唯一の読者であり、あなたにとってのわたしも、そうなのです。

それで充分なんだわ。わたしはあなたの話を全部信じるし、いつだってあなたの手紙を読むことが出来るのだから、そして、それがお互いに認めあった権利として要請されている以上、わたしたちは、手紙を書いた分だけ、明瞭な確実な存在となり、同じ分だけ曖昧になって行くんです。わたしたちは、ねえ、おわかりになるでしょう？　お互いにとって、最も現実であるところの白昼夢なのだってことが。だから、どんな秘密を持つことも意味のないことなんです。たとえ、自分自身にさえ隠しておきたい秘密でも、それはきっと夢の中に巧妙にしのび込んで来てしまうのだから、そして、わたしが、まったくのところ、夢の中で（生身のあなたには興味がないし、会っても話すことなんてないもの）こうしている以上、わたしたちは自由で、自由すぎて、秘密さえ持てないでしょう。脳髄を毒の牙で噛む黄金の蛇のように、どんな秘密も、このわたしたちの夢の中に、耳の穴から侵入して来るわ。わたしたちの甘美で無気味ないやらしい夢が終わる時、この観念の王国が終わる時（どんな王国にもどんな神々の国にも、黄昏はやって来ます）、何がおこるのかを考えると、わたしはぞっとします。もっと良い方法、お互いが傷つかずにすむ方法で終わらせることが出来たら！　どうぞ、わたしを愛してるなんて、二度と言わないでください。世の中には、もっと可愛らしい、愛されるために存在している女の子たちが、あなたの学校にだって大勢いるというのに！

彼は折り目の毳立った黄ばんだ手紙をゆっくりとたたみ、水色の封筒にしまい、それをノオトの間にはさみ込む。

《彼女は腐蝕とぴったり重ねあわされた新鮮な生き生きとした肉体とでもいったような矛盾を意味しているのだった。不快な死臭を発しながらねばつく液をしたたらせ（まるで彼女の生れ持った癒し難い身体上の欠陥である口臭か腋臭のように、それは奇妙にぴったりと彼女の身についているのだ）、しかし、このうえない新鮮な輝きに包まれて、彼女の手脚はしっかりと伸ばされ曲げられ、空間の中を自由に泳ぐのだった。ただし、それはぼくが見ていない時に限られていた。この奇妙な矛盾の前でぼくは戸惑い、彼女がぼくから無限に遠ざかるのを感じる。彼女が最も生気に溢れ、生きることの喜びと楽しみの中で、若い娘らしいはちきれんばかりの生の充実の中で身体を駿馬のように躍らせる時は、決してぼくの前ではなかったし、彼女はぼくの前で、いつも居ごこち悪そうに黙りこみ、蒼ざめた皮膚をして、一瞬でも早くぼくの前から姿を消すことを望んでいたのだ。幼い恋人たちの無経験と羞恥による無器用さが、ぼくらを支配していたのではなかった。彼女は今にも死にそうに見えたし、それはぼくのせいでそうなってしまうのだった。彼女がぼくと一緒にいる時以外には、魅力的な若い少女だということは、ぼくを安心させ、そして不安にさせる。彼女の手は他の男の手の中で汗をかき、他の男の腕の中で彼女は薄い肌色のスト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com